有島武郎著作集第十五輯『芸術と生活』を読む（一）

――エピグラフ解釈を中心にして――

宮野光男

有島武郎著作集第一五輯『芸術と生活』（大十一・九）は、有島によって編集され、エピグラフが掲げられている輯としては最後のものである。有島武郎著作集としては、有島の没後、叢文閣の足助素一が編集して出版した第十六輯があるが、これには当然のことながらエピグラフが付けられていない。したがって、著作集論としては、これが最後というわけではないが、エピグラフとの関連において考察する試みとしてはこれが最後ということになる。

かつて、「解釈と鑑賞」に発表した「宣言一つ」論（註一）は、著作集第十五輯のエピグラフとの関連において、「宣言一つ」を抜き出して論じたものであるが、この度は、これを踏まえながら、さらに輯全体の一五篇のエッセイを視野に入れながら、それらをエピグラフとの関わりを通して考察し、有島の「詩と詩論」論のひとつとして位置づけてみたい。そのためには、まずエピグラフとして掲げられている詩の解釈の可能性について考えてみよう。

＊

有島武郎著作集第十五輯『芸術と生活』のエピグラフには、次に掲げる「未来の詩人たちに」の後半の三行（≪　≫）が採択されている。なお、この詩の有島による訳はないので、岩波文庫版『ホイットマン詩集草の葉』（註二）の訳詩全文を掲げることにする。

未来の詩人たちよ、未来の雄弁家よ、歌手よ、音楽家よ、／現代はわたしの真価を認めずわたしの存在理由を悟ることもできない、／だがあなた方、この土地に生まれ、逞しく育った大陸の子供ら、前例がないほどに偉大な新しい種族よ、／奮起したまえ、あなた方こそわたしの真価を認めてくれるに違いない。わたし自身は未来のために一つか二つの暗示の言葉を書き付けるだけ、／ただ一瞬進み出てそれからすぐに向きを変え急いで闇の中にもどっていくだけ。

≪すっかり立ちどまってしまうことなく放浪をつづけ、行きずりにあなた方を眺めもするが、それからすぐに顔をそむけ、／その視線の意味を証明したりすることはあなた方にまかせて、／かんじんの大仕事はあなた方に果たしてもらえると期待をかけ

ているわたし。≫

この詩は、元来一八六〇年刊行の『草の葉』第三版中の"Chants Democratic"の第一四歌であったものが、一八六七年第四版において短縮改訂され、一八七六年第五版において「答えるものたち」詩群に移され、最終的には一八八一年第七版において銘詩群のなかに独立した詩として編入されたもので、その位置づけにあたっては、ホイットマン詩のなかでは長い間かかった詩のひとつであり、ホイットマン自身にとって自らの詩人性の限界を認識し、かくのごとく未来の詩人にその思いの成就を託さなくてならないと考えていたことを知ることができる詩なのである。(註三)

ホイットマンの、詩もしくは詩人に対する期待がいかに大きかったかについては、よく知られているところで、そのことは、『草の葉』初版の序においてすでに明らかである。以下、その叙述に従って確かめてみよう。

いつの時代のいかなる民族も、おそらくアメリカ国民ほどに、豊かな詩心をそなえたものはいない。合衆国そのものが本質的に最大の詩篇なのだ。

ホイットマンのいう〈未来の詩人たち〉、〈この土地に生まれ、逞しく育った大陸の子供ら〉が、直接的には〈アメリカ国民〉と響きあっていることは言うまでもない。その意味では初版の序は、アメリカの詩人に対する期待であり、アメリカの詩人である自らへの抱負の表明でもある。しかし、〈詩人の目から見れば、大芸術家ではない人間が、最大の芸術家に比べてすらなんの遜色もなく神聖で完璧なこともありうるという事情は、少しも異とするにあたらないことなのである。〉というあたりから、ホイットマンの言う詩、もしくは詩人は、普遍的存在へと変化を遂げ始めているのである。

亀井俊介氏は、〈私は*Leaves of Grass*　初版の誕生の秘密の一つは、政治家として、あるいはジャーナリストとして生きてきたWhitmanが、彼の政党に、そして政党政治そのものに「絶望」したところにあるとみたい。〉(註四)と述べている。そして、その〈絶望〉が、彼自身の〈デモクラシーに対する希望を再確認し〉、〈少なくともその将来を「信ずる意志」を、従来の観念一辺倒の浅薄さや党派根性とは隔絶した魂の根底において、自己のものとした〉ことが〈自分の中にそういう人間・民衆の代表たるべき使命と宿命を見出した〉ホイットマンの〈詩魂・詩才〉の根源にあることを指摘し、〈詩人予言者待望論を展開している〉と述べている。また、「未来の詩人たちに」詩篇については、吉江孤雁の『近代詩講話』(大四　早稲田文学社)の中に西条八十訳「来らむとする詩人たち」が引用されていることの指摘もあり、日本におけるホイットマン受容のすがたを知る一つの縁となっている。

また清水春雄氏は、『ライラックの歌――ホイットマンの教説』(註五)においてこの序文が〈エマソとの共感を明らかにしている〉ことを指摘している。そして、これが〈革新的な詩論を展開〉したものであるが、これは初版だけに掲げられたものであり、二版以後は、

〈その趣旨を多分に盛りこんだ詩「水青きオンタリオ湖畔にて」となって現れている〉との指摘もあって興味深い。この詩は有島によってその晩年に有島武郎個人雑誌『泉』誌上にその一部分が訳出されているが、ホイットマンが、序において述べようとしたことは、実際にその詩作品において表現されていることに、有島が気付いていることを知ることができるところである。清水氏はさらにホイットマンが、エマソンのいう〈自然から崇敬の教訓を学ぶ〉〈最も幸せな人〉であったといい、その自然観、汎神論的神観、キリスト人間論においてもエマソンと等質のものをもっていたことを指摘しているのであるが、このところに、有島の理想とする詩、詩人の基本的な条件を見出すことができるのである。

序においてホイットマンはさらに、詩人は〈予言者〉であり、〈独自な存在〉であり、〈調整を統べる基準である〉と述べている。そして詩人は〈神秘〉を感受する視覚の謎めいた働きをもった存在でもあるという。したがって詩の真髄はすべての存在の〈個々の特色や、そのほか多くのありようを支える生命であり、魂の内部に存在している〉ものである。そして、あらゆる富、権勢から自由であり、〈いかなる個人や集団にも屈従することなく——無教育の逞しい人たちと若者たちと人の子の母親たちを友と〉する者、〈宇宙〉にとって〈願ってもないひとりの愛人〉なのだ、という指摘もあるが、それは有島がホイットマンのなかに見ようとした五箇条の特色（「ホイットマンに就いて」大十・三）——個性、具象性、健全性、愛、神秘性——のひとつである〈神秘性〉へのホイットマン自身の憧憬が、詩人としての生命の根幹をなしているものであることへ認識であると同時に、有島のいうローファーとしての本質、精神的無政府主義者、絶対的自由人、……というイメージがすでにこのなかで主張されていることに気づくことができる。

以下、さらにホイットマンのいう詩人のイメージの豊かさを、序の叙述にしたがって列記してみよう。

もっともすぐれた詩人なら、過去と現在の内部から、やがて未来へとつながっていくひと筋の糸を作りだす。

もっともすぐれた詩人なら、人物や場面や情念に強烈な光をあてるだけで終わることなく——ついに高みに上がり、すべての部分を完成させる——

もっともすぐれた詩人ならば、道徳のお説教を試みたり、それを織り込んだ寓話を語るようなことはない——彼には魂というものがよく分かっているからである。

大詩人とは個性的な文体の持主をいうのでなく、むしろ思想や物象を、ほんのわずかな増減すら加えずに、元のままの形で通過させる水路であり、自分自身を思いのままに通過させる水路なのである。

詩人ほど自由に信奉したり歓迎したりするものはいない。詩人は自由の代弁者であり解説者である。

詩人ホイットマンは、その魂の内奥に〈ポエジー〉（註六）を包含しているすぐれた詩人の発見者でもあったのである。詩人の発見は、人間発見を導き出す。そのことは当然のことではあるが、詩人論が人間論へと発展する契機となるのである。

人間が完全な、あるいは壮大な存在になることができるのは、ひとえに自分の内部に至高者を意識するためなのだ。

男や女たち、そして大地とその上に住むすべてのものたちとは、ありのままの姿でとらえられるべきであり、彼らの過去と現在と未来を探る試みは、けっして途絶えることなく、虚心坦懐に果たされねばなるまい。

かくのごとく、詩の、あるいは詩人の歴史において果たす役割について述べるホイットマンは、〈詩の、あるいは性格や仕事の、価値を見定める究極の尺度〉について、以下のように言っている。

偉大な詩は、時代から時代へと受け継がれてゆく共有財産である。

偉大な詩は、男や女にとって、けっして完成されつくしたものではなく、むしろひとつの始まりにすぎない。

以上、初版の序からホイットマンの詩と詩論のエッセンスを抜き出したのであるが、これからも明らかであるように、有島がホイットマンから受け継いだもの――それは執筆時代を異にする五篇のホイットマン論のなかで、それぞれの時代の特色として強調されていることになるのだが、――のすべてがすでに表現されていることに気づくことができる。（註七）

＊

つぎに問題になることは、ホイットマン自身が、彼の詩の世界で、この理想をいかに表現することができたのかということであろう。ホイットマンのすべての詩篇のなかで直接的に、間接的に表現されているこれらの思いを、有島がいかに受容し魂のなかに浸透させていったかについては、ホイットマン論において垣間みることができることについては、すでに述べたところである（註八）が、このところで、エピグラフ詩解釈のもうひとつの前提として、ホイットマンの、詩あるいは詩人への期待（同時に自らへの期待）が、端的に表現されている詩、詩人をうたった詩を取り上げてみよう。

〈さあぼくの朝のバラードをとっくり聞いてくれたまえ、「答える者にそなえる証しを話してあげる〉（「『答える者』の歌」）とうたいだしているこの詩は、「序」で述べていた詩人の条件がそのままの形でうたいだされている、ホイットマンの詩人原論ともいうべきものである。

ここでその全文を掲げることはできないが、その一部、たとえば詩人が〈物象と人類との現在までの精華であり精髄である〉ことを

述べ、真実なものを創造するものが、

産む者は歌い手ではなく、ただ「詩人」のみである、／歌い手たちは歓迎され、理解され、何度も何度も現われてくるが、しかし詩の作り手が、「答える者」が生まれ出る日は、同様に生まれ出る場所もごく希であった、（2）

とその存在の隠匿性がうたいだされていること、そして、〈本当の詩の言葉〉の働きについて、

本当の詩の言葉は死にのぞむ準備をさせるが、さりとてそれは終末ではなく、むしろ発端であり、／男であれ女であれただのひとりもその人の終点に連れてきたり満足させ充足させてしまうことなく、／手をとって導く人をすべて広大な宇宙のさ中に連れ出して星辰の誕生を目撃させ、その意味のひとつを理解させて、／いまは揺るぎない信念に燃えるその人を送り出し、終わりなく連なるあまたの円い軌道をくぐりぬけつつ天翔（あまが）けり、二度とふたたび静止することのないようにさせるのだ。

とうたっているのであるが、このところで、有島の詩の言葉への思いが「惜みなく愛は奪ふ」において、

詩人とは、その表現の材料を、即ち言葉を智的生活の桎梏から極度にまで解放し、それによつて内部生命の発現を端的にしようとする人である。（中略）表現さるべき最後のものは昔も今も異なることがないのだ。縦令（たとひ）外面的な生活が複雑にならうとも、言葉の持つ意味の長い伝統によつて蕪雑になつてゐようとも、一人の詩人の徹視はよく乱れた絲のやうな生活の混乱をうち貫き、言葉をその純粋な形に立ち帰らせ、その手によつて書き下された十行の詩はよく、生の統流を眼前に展くに足るべきである。然しそれをなし得るためには、詩人は必ず深い愛の体験者でなければならぬ。出でよ詩人よ。而して私達が直下に愛と相対し得べき一路を開け。（二十一）

と述べていたことを想起してみよう。ここに、ホイットマンの詩への期待と有島のそれとがみごとに響きあっている姿をみることができると同時に、有島のこの言葉への思いが、中川一政の『見なれざる人』（大一〇・一）評の〈言葉といふものは本当に不思議なものです。あれは死んだもの、やうだが生きていますね。〉という言葉讃美につながっていることを知ることができるのである。有島は続けて、

言葉には意志がありますね。擅まに逆用しようと企てる人には言葉はどこまでも不従順だが、言葉をその内在的な力に於て受取り、それを素直に用ひようとする人に対しては、実に抜目のない自動的な忠実な、友達となつてくれますね。（「雑信一束」第十一信　大十・三）

と述べているが、このところにも、愛を本質とするところの詩人に対する期待が表現されているのである。

ところで、ホイットマンは、〈本当の詩〉を自らの詩の中でいかにうたっているのであろうか。

本当の詩、(ぼくらが詩と称しているものは実はただの絵空事)、／夜の秘めごとが歌う詩、それからぼくのような男たちが作り出す詩、／ぼくがいつも携え、男なら誰でも携えている人目につかぬ場所で内気に垂れさがっているこの詩、／(思うところあって今こそ公然と認めるが、どうかはっきり知っておいてくれたまえ、ぼくのような男たちがいるところならどこにだって逞しくて潑剌たる詩が潜んでいる)、(「自発的なぼく」)

という表現からも明らかであるように、肉体そのものが、つまり存在そのものが詩であるというところにホイットマンの詩論の特色のひとつがある。これは、さらに、

ぼくはもう芝居はやめた、仲間たちから自分を仲間はずれにする必要がどこにあろう、／おお君ら世の嫌われ者たちよ、少なくともぼくだけは君らを嫌うことなく、／直ちに君らの群のまん中に入りこんで、君らを歌う詩人となろう、／ほかの誰に対してよりもまず君らにこそ愛をそそごう。(「天然に帰る瞬間よ」)

という表現があるが、この詩が有島によって著作集第三輯『カインの末裔』(大七・二)のエピグラフとして引用されていることからも明らかなように、本当の詩とは、換言すれば詩を詩たらしめ、詩人を詩人たらしめるものは、いのちをうたう詩人の詩ということになる。〈ポエトを、ポエムをそのものたらしめるポエジー〉(註九)が問題になるところである。

このホイットマンの思いは、たとえば「君に」において、

君がたとい誰であろうと、君がわたしの詩になるように、わたしは君に手を触れる、／口を君の耳もとにぴったり寄せてわたしはささやく、(中略)今後わたしは一切を捨ててひたすらに君の賛歌を作る、／(中略)わたしだけが君のうえにどんな主人も、目上の人も、神様も、君の内部に本質的にそなわる価値を超えては認めぬ者。

とうたいだしているように、人間の価値を、存在そのもののなかに見い出そうとする姿勢の表現であり、人間存在の根源的な権威、価値を本来あるべきところに位置づけようとしているものであることをも知ることができるところである。

それが、ホイットマンにとっても、有島にとっても〈魂〉であったことは言うまでもないことである。

さて、このところで真の詩の理想をうたいだしたホイットマンが、真の詩人であり、真の詩を産み出すことができるものであるか否か、ということを自らに問わなくてはならないものであることに気づいていることに留意しなくてはなるまい。このところで想起することができるのは、著作集第七輯『小さき者へ』のエピグラフ詩「回転する地球のうた」(3)の一節、〈最上の言葉を語るよりさらによいことがわたしには分かる、／それはいつでも最上の言葉を語らずにおくこと〉、である。この詩がホイットマン詩「表現されぬもの」、

いったいどんなふうに言えばいい、／一切の周期も、詩も、歌びとも、芝居もすんで、／誇りとされるイオニアの、インドのそれを――ホメロスも、シェイクスピアも――長い、長い時間のぎっしりと無数の点で埋まった道も、地域も、／輝いている星群と星たちの作る天の川――「自然」のさまざまな脈搏の刈り入れもすみ、過去を想うすべての情熱、英雄、戦争、恋愛、崇拝、／窮極の深みにまで投げこまれたすべての時代の測鉛、／人間のすべての生活、咽喉、願い、脳髄――すべての経験の表現もすみ、／長いものであれ短いものであれ、すべての言語、すべての国に数しれぬ歌が生まれ出たあとも、／なおも何かが、詩歌の声でも活字でもまだ語られていない――何かが欠け、(たぶん最上のものがまだ表現されず、欠けており)(「表現されぬもの」)

と基本的には、響きあっているものであることについてはかつて述べたことがある(註十)ように、この表現は、自らの表現未熟なことへの反省、言葉に対する不信感の表現でもあろう。しかし、それがたんなる技術的未熟さの問題としてのみ表現されているのではないことは、〈最上のもの〉への憧憬がその背後にあり、それは本質において表現不可能なものであることのもどかしさと同時に畏敬の念の表現でもあろうが、有島がこれをエピグラフとして掲げているということは、ホイットマンのその思いを有島もまた受け継いでいる者であったことの表現でもあったのである。

ところで、『草の葉』は、現在の形の成立した第七版以後に書かれた詩篇が、「古希の砂粒」詩群(一八八八―九年第八版)、「さようならわたしの空想」詩群(一八九二年第九版)が、付録として追加されて行く歴史をもっている(註十一)が、〈『草の葉』を終えるにあたって――一八九一年〉というサブタイトルが付けられている「さようならわたしの空想」序文には、初版序のような昂揚した調子の詩、詩人への期待やオマージュはすでに語られていない。そして、自分の序文に対しても〈こんなつまらぬ付け足しや染かと見まがう縁飾り(それとも斑点もしくは汚点)は、いっそ遠慮するほうがいいのではないか〉という忸怩たる思いを述べながら、みずからの〈引退〉のときを思いつつ、

こういった種類のいとも巧みな問いかけに答え――と言うよりむしろ挑戦して、さらにこれまでの詩群たちの結びとしても、今ここにこのささやかな詩群を送る。ここに集めたかぎりでは、

果たして印刷にする価値があるものかどうか甚だ心もとないが（たしかにわたしは今あらためて書くべき新しいことはひとつもない）――七二回目のこの一年の日常を――余儀なく陋屋に身動きならぬ日常を――過ごしていく術として、わたしはこんなふうな老年の小さな詩文いじりに何かと形をつけようと努めている、

という、まさに〈老いのくりごと〉を書き綴っているのを見るにつけても、自らの詩人あるいは詩人性への抱負は、次の世代の詩人へのそれへと変化していることを知ることができる。つまり、自らの限界を知るに至っている、ということでもあろう。

最初、一八七六年版の『草の葉』第五版から組み入れられていたのに、一八八一年版の第七版には収録されていず、のちに、先に述べた付録に再録された「成熟した詩人が現われたとき」に表現され、待望されている〈成熟した詩人〉こそ、ホイットマンのあらまほしき詩人像であったにちがいない。

成熟した詩人が現われたとき、／喜んで「自然」は（昼と夜とのさまざまな盛観に富みながら、丸く感覚を持たぬ地球は）思いきって言ってのけた、「このひとはわたしのものだ」、／しかし誇り高く、負けずぎらいで、折り合うことを知らぬ人間の「魂」も、遠慮しないで言ってのけた、「いいえ、このひとはわたしだけのものだ」、――やがて成熟した詩人が両者のあいだに立って、それぞれ手をとった、――そしてきょうも、いつまでも、融和する者、結びあわせる者としてその場を離れず、しっかりと手を握って、／両者を折り合わせ、完全に嬉しげに彼らがひとつに解け合う日まで、――けっして放すことはしないだろう。

（「成熟した詩人が現れたとき」）

この詩にうたわれている詩人の基本的な役割というものは、言葉に命を与えることであり、人間関係を可能ならしめるもの、つまりとりなしとしての存在、仲保者としてのそれだというのではないだろうか。

＊

以上、『草の葉』に見られるホイットマンの詩や詩人に関する直接的あるいは間接的な表現を拾い読みすることによって、ホイットマンの詩と詩論の本質を垣間みてきたのであるが、おそらく有島もまたこの文脈のなかで「未来の詩人たちに」を、期待をこめてエピグラフ詩として選定したにちがいない。有島のその思いが「詩への逸脱」（大十二・四）における詩の可能性への期待として、そしてそれに携わる者としてはほんとうにふさわしい者であるのかという内心の問いを持ちながら、あえてそれに踏み切らざるをえなかったことへの決意表明であったにちがいない。それと同時に、これはまた有島の、きたるべき真の人間への期待表明でもあったのである。

【註】

一　「『宣言一つ』試論」（平成元・二　「国文学解釈と鑑賞」）

二　杉本喬・鍋島能弘・酒本雅之訳　岩波文庫版ホイットマン詩集

『草の葉』上巻（一九六九・五）

三　Harold W.Blodgett & Sculley Bradley ed. WALT WHITMAN Leaves of Grass COMPREHENSIVE READER'S EDITION NEW YORK UNIVERSITY PRESS 1965

四　亀井俊介「ホイットマンの神話と実体」（『近代文学におけるホイットマンの運命』一九七〇・三　研究社）

五　「ホイットマンとエマソン」（昭五九・五　篠崎書林）

六・九　吉満義彦「ポエジーについて」（『吉満義彦全集』第五巻　昭六〇・一　講談社）

七・八　「有島武郎研究――『詩への逸脱』をめぐって――（一）、（四）～（六）」（昭五〇・十一、五三・十一～五五・十一梅光女学院大学「日本文学研究」第十一、十三～十六号）

十　「有島武郎研究――有島武郎著作集第七輯『小さき者へ』をめぐって――」（昭五九・十一　梅光女学院大学「日本文学研究」第二十号）

十一　酒本雅之「解説」（註二に同じ　下巻　一九七一・七）